

## 高師附属から金大付属に

昭和二十二年（一九四七）に創立した**金沢高等師範学校附属中学**は、戦後の教育改革のなかでその校名と学年編成を次々と変化させていった。

昭和二十三年四月には、学校教育法の施行により全国的に新制高等学校制度が実施された。これに伴い本校でも新制中学校の上に新制高等学校が併設されることになった。この時、一回生が高校二年生、二回生が高校一年生となったのである。

翌昭和二十四年には金沢大学が創立され、教育学部の附属学校統合計画が立てられた。そのなかで、本校は新制高等学校として新たに出発することになり、六月、校名も**金沢大学金沢高等師範学校附属高等学校・同中学校**と変更した。これに伴い昭和二十五年度より新制中学の入学募集を停止して、その代わり高等学校の第一学年（四回生）を三学級に増加した。本校に中学校から入学した最後の学年は昭和二十四年入学の六回生である。

ついで、昭和二十七年三月、金沢高等師範学校が閉校するに及び、校名を**金沢大学教育学部附属高等学校**と改め今日に至っている。この時、教頭川西弘晃は、教育漢字を使用して「附属」を「付属」と表記することにした。なお、国立学校設置法施行令の表記に基づき「付属」を「附属」と変更したのは、昭和六十二年のことである。

このような変遷をたどった初期の本校では、生徒の転入、転出が頻繁に繰り返された。たとえば、興村哲郎（一回生）の調査によると一回生の転出、転入は次のようである。昭和二十二年の金沢高等師範学校附属中学創設時、特別科学学級から転入したものの十四名、他校から編入したものの六名。一回生は二十名で出発した。翌年、いわゆる飛び級で中学校を四年で修了し四高などに入学したものの八名、他校に転学したものの二名、一方、高校二年から編入した者が女子を中心に十一名いた。さらに二十四年、中学五年の形で卒業したものの三名、高校三年生として転入したものの十名。二十五年三月、高校三年生として卒業したものは、休学者一人を差し引いて二十七名である。このような頻繁な転出、編入は、二、三回生も同様であった。

男女共学は本校発足時の第一回中学入学生（四回生）から実施された。しかし、当初の共学は変則的であった。第一回中学入学生（四回生）は、男女共学クラス一学級と男子のみのクラス一学級で出発し、中学三年間クラス替えなし。第二回中学入学生（五回生）も男女共学クラス二学級、男子のみのクラス一学級で出発し、三年生になった時ようやくクラス替えされ全クラス男女共学になった。男子クラスの者たちが共学クラスを羨望の目で見ていたの言うまでもない。

昭和二十三年度からは新制高等学校に移行したことにより、全学年男女共学となり、一〜三回生に県下旧制高等学校からの転入が相次いだ。しかし、遺憾ながら特別科学学級上がりの男子に比して高等女学校出身の女子の学力の遅れは否めなかった。堀駿子（一回

生)は当時の思い出を『付属十年』で次のように語っている。「何しろ男生徒の大部分は戦争中も特別科学教育を受けた優秀な方達で、殆ど全教科にわたり女生徒の遅れていること甚だしく、特に理数科方面ではいろいろ男の方達にお教えを受けることが多かった。」それを見たある教官が「何と男の子と女の子の仲がよいことやら」と言ったという。当時、男子生徒が率先して清掃をするなど、女子生徒は男子生徒から非常に大切に扱われていた。  
(金沢大学教育学部附属高等学校『附高五十年』一九九八年六月発行より引用)

**(付記)** なお、本校は金沢大学学部改組に伴い、平成二十年(二〇〇八年)より校名が「**金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校**」に変更されましたが、おそらく日本一長いこの校名については実際の使用や書類の作成上に不都合なことも生じたので、現在は金沢大学の許可も受け「**金沢大学附属高等学校**」と校名を略称して表しています。